

には云はぬけれど、言葉の意味は全く然うであつた、これが何んとして忍ばれやうそりや成程以前は恩義にも預つた、世話にもなつた事が有る、けれど、其の返禮は既に業にした後である、一時借りて貰つた金は既に返済して、其上に度々の調達を命せられ、其の金積りく少からぬ額となつて居るのにも拘はらず、未だ一錢の返金だも受けたことが無い、いや、將來とてもよも辨償さるゝやうな事はあるまい其の他の物品に於いても、いろく徴發の命に接し、高貴なる臘虎の皮さへ、既に二枚まで進呈させられて居るほどである、それに尙ほ昔日の恩義々々を繰返され此の上の用命に事を缺いで、物も有らうに、婦人の生命とする貞操を弄ばふとは、不埒至極の男ではないか、これが會社で獵業と云ふ弱い商賣を營んで居ないならば假令昔時の事は有つても構はぬ、思ふさま面責して遣るのだけれど、此の赦し難いところを免して、斯うして此方から逃げて居るとは、よくく割の悪い身の上だと啣つのであつた、

某日の事、佐々木邸へ来て、先生に是非お目通りが願ひたいと云ふ老女がある、服装も粗野ならず、人品また賤からぬに用向のほどを問ふと、それは先生にお逢ひ申してからで無ければと云ふ、曾て一時は來訪者に深い注意を拂つた事もあるが、其の後だんく馴れて来て、今では何者が來やうと更に構はぬ事となつて居るので、立關拂ひも食はさず、照一はこれに會つて見ると、それは別人ならぬ彼の亘理子爵家の老女隅江であらうとは、

彼女は初對面の挨拶了つて、「本日お邪魔に参りましたのは、少々折入つてお願ひ申したい事の有つて………」と甚だ愁はしい様である、

「どんな御用で——」照一は咲子が死んだ今日、最早や嫁に迎へて呉れとの事でも有るまい、其の他には當主恒政、其の夫人花子の事が有るけれど、豈夫それ等の事では無からうと思つて聞くと、隅江は先づ鼻つまらせ、「御用の筋と申しまするのは、先年貴方様に戀着あそばされました、咲子姫の事で御在まするが、既に御承

知かは存じませぬけれど、其の後お姫様の御執心と申しましたら、却々並大抵の事では御在ませんでしたよ、傍の見る目も傷はしいほどで、朝夕近侍して居る妾等は其お心中を察し申上げて、成可くお忘れになるやうにと勉めて居た處へ、出入の按摩奴が不圖した事から江の島釋兒ヶ淵の由緒をお聞かせ申しましたら、それを聽いて身にツマされましたものと見えまして、遂々其の釋兒ヶ淵へ身を投げて、お果てなされたので御在ます——それとお知りなされた大夫人は、大層お歎きになりまして、それでは姫は焦れ死をしたのちやから切めて位牌にでも宜い、佐々木様に一片の御回向をして頂いたならば、姫も來世で浮かばれるであらう、それが名僧知識の讀經よりは、何程佛の功德になるか知れぬと、斯う度々仰せられたので御在ました、其の後大夫人には御前様に逝かれ遊ばして、俄かにお氣落ちあそばされたものと見え、ドツと病症の蓐にお就なされて、只今では大分の御重症と伺はれます乃で此の妾を枕邊へお召になりまして、これが生前の願ひゆる、日頃の望み、其方

が佐々木様にお願ひ申して、姫の回向を頼むぞと、苦しい息の下より仰せになりましてので御在ます………」と云ひさして、手巾取出して鼻をかむのであつた、

(百十三)

隅江は尙ほも語をついで、『……』と申すやうな有様で、本日態々伺ひました次第で御在ますが、これは大夫人が最期のお願ひでも有りますれば、また此の私めが一生のお願ひで御在ますほどに、何卒お聽容に相成りまするやう、幾重にもお頼み申します」と言葉を結んだ、

始終を黙つて聞いて居た照一は、成程咲子が釋兒ヶ淵へ身を投げて死んだ事は聞いた、また死ぬる前、按摩から長者が娘と釋兒との情死の話を聞いたと云ふ事も耳にして居る、それゆる、令嬢は可哀相なものだ、氣の毒なものだとは、折々思はぬのでは無かつた、然るに今、此の話を聞いて見ると、母君たる奥方にまでも、これ

以上の哀傷が附纏ふて居る、それを今茲に、切めて自分の息ある中に、不幸な娘の靈を慰めて遣らうとの痛はしい心を、酌まぬ譯には行かないのである、
 「宜しう御在ます、お嬢様の墓參を致しませうです、お邸の菩提所は何處でしたか
 ぬ」

聞くより隅江は、飛立つほどの嬉しさで、「え、お聴容下さいましたか——う、嬉しう御在ます、此の由を大夫人にお聞かせ申したなら、どの様にお喜びになるか分りませぬ、これではじめてお歿去になつたお姫様も浮かばれます——や、一刻も早うお邸に立歸りまして、御病中の大夫人をお歡ばせ申しませうよ、事に依ると此の言葉をお聞きになつて、御本復になるかも分りませぬ——どれ、失禮致しませう、寔に有難う御在ました」とまさに起たうとして、不圖、思出したものゝやうに、「あ、年が寄るとよく物忘れを致して何うもなりませんぬ——彼の、殿様の仰せで御在ました、貴方様にチトお遊びに入らせられますやうにとのお言傳で御

在ます、一番に此の事を申上げる積りで居りましたのが、遂にお傷はしいが先に立つて、既での事に忘れて歸る處で御在ました、面目次第も無い」
 殿様とは恒政の事である、花子と結婚して其の後如何にして居らるゝやら、時には念頭に浮ばぬことも無いが、それを自分から聞くのは何んだか耻辱のやうな氣がして居た、然るに今先方より云はれたので、これ幸ひに、「然うですか、何うか宜しう申して置いて下さい、あの、御熱心な飛行機は如何なさいましたか、此の頃ではトンとお噂を聞きませんが……」
 「え、あれで御在まするか、相變らずお邸内で弄つてはお坐でなさいますが何分にも令夫人が大好でゐらせられますので、絶えず御夫婦で外出を爲されますから、それで十分お行りなさる暇が御在ませぬ——彼の、令夫人と申しますのが、御承知の通り成上りで御在まするものですから、何うしても我意を張つて、仕方が御在ませぬ、彼の永年お邸に居て、忠義の聞え高かつた西村左門殿でさへ、憤慨してお邸を引退られた位ゐる妾も大夫人御在世中は兎

も角、若しお歿れにでもなりましたなら、迎も彼の中には居られませぬ、これと申しますのも、最初御親族や近臣の異議有つたのもお構へなく、殿様がお迎へになりましたものですから、それでこの様な事に成りましたので御在ます、平の者が、華族の奥方に出世しますと、あゝも威張たいもので御在まするか知ら、今では御同族中の指揮者で御在ます」と問はぬ事までも語り出たのは、これも日頃鬱積した不平が、茲に破裂したので有らうと思はるゝ、

聽て隅江はイソ／＼として立去つた、後で此の事を聞いたさかえ子は、はじめて咲子の死因を知つて、一方ならず愕いた、それと同時に、只た一人の照一の爲めに斯くも多くの女が身を損ふ中に在つて、自分獨りが斯うして居るのはと、何となく勝利を博したやうな氣がして、心中密かに愉快に禁へなかつた、

(百十四)

茲にまた彼の先年發奮して米國に渡航した延子は、其の後市哥古在なるウエスト夫人方に在つて、家事の手傳をしながら令息令嬢に日本語を教授して居た、すると、同家に於いても延子の性質または素行を見て、將來の希望を尋ね、成業までの學資を出すから、志望通りにせよと言出したのであつた、延子は悦んで直ぐさま土地の小學校に入り、廿餘歳の身を七八歳の兒童の中に立交つて、一生懸命に勉強した、併し、それが爲めに家へ歸つての課業は少しも怠らなかつた、

此の延子が熱心勉學の効は程なく顯はれて、ズン／＼と同級生を超越し、小學より中學程度に進み、更に市哥古大學に入つて醫學を修むる事とした、延子の意中は、同じ醫師になつて、照一よりも更に傑い者に成りたい、否な、成つて見せたいとの希望であるのだ、

此の意志でもつて勉強するのであるから堪らぬ、數ある同級生を後に落して、後には同校の特待生となり、二百五十餘名中の首座を以て卒業した、

其處で最う、直ぐにでも歸れる身であるが、斯うなつたのも、これ偏へにウ夫人のお蔭と思つて、卒業後、更に六ヶ月間を従前の通り其の家に在つて相變らず子供の教習に勉めて居た、

同家に於いても其の行爲を諒とし、歸國の際には何角と出来得る丈の便宜を與へて呉れた、尙ほ同女の名を以て、將來日本に於いて慈善的病院を設立する場合には、進んで寄附金をしやうとの申出もあつた、延子は其の好意を謝し、紀念の手藝品を遺して同家を辭した、

斯くして途中恙なく歸朝し、先づ第一に訪ふたのは京都であつた、

豫て彼の地出發前に通知して置いた山村方を訪問すると、爰一週間ばかり前に一家擧つて名古屋へ轉住されたとの事に一方ならず落膽したが、では引返さうかそれとも何うせ東京へ出るのだから、一旦郷里へ歸つてからにしやうかと、一寸その取捨に困つたが、先づ其の模様を聞いてからにしやうと、更に轉じてヤングを訪ねた、

すると、同人は依然として同じ教會に在て、十年一日の如くに布教に従事して居た、延子の顔を見るや、喜んでこれを迎へ、「まあ、能く壯健で歸つて來ましたね、ドクトルになつて——随分苦勞でしたらう」と成業を祝して、尙ほいろいろと勦つて呉れる、

「お蔭さまで、先づ一人前の者になりました、これからが社會に出て働かねばなりませんから、眞の苦勞はこれからです」『其のお心掛が肝腎です、それさへ有らば大抵の事は行つていけます』

それより彼の地の事ども話題に上つて次ぎから次へと興は盡きない、

『時に先生、山村さんは名古屋へお往でになりましたさうですね』『はい、然うです名古屋の女學校へお往でになりました、彼の方もね、旦那様が彼方へ轉任されたものですから兩方へ分れて居ては不便だ、何うかして自分も行きたいと云つて居られました、何分にも此方に適當の後任者が無い爲め、今まで我慢して居られたので

す、處が、今回其の後任者が見付かると同時に、豫て運動して居られた彼方の學校が、恰度都合好く出来たものですから、それでお往でになりました」『然うですかそれは寔に都合の好い事——妾はそれを知らないものですから、當方へ伺ふ前に柳の馬場を尋ねて失敗しました、就いてはお目に掛つてお禮を述べたいので、これより名古屋へ引返さうと思ひます』『え』と嬢は其の顔を見て、『貴女故國へ行くのでせう——それからでも宜いですが、それに只今お往でになつても、奥様は宅にお在でにならないかも知れません、出發の時、此の際一寸郷里へ行つて來やうと思ふと仰有つて居ましたから』

(百十五)

延子は今、七年振に錦を着て故郷へ歸るのである、實家へは途中からして豫じめ電報して置いたので、其の日取には両親はじめ、親戚村の人々が濱田まで迎へに出

やうと云ふのだ、

延子は村の者より、大層ハイカラになつて、生意氣だと云はるゝのが厭だから故らに和服を着用した、

汽船から上陸すると、此の出迎の一團の中に、懐しい永沼先生も交つて居られた、『ほう、大層大人びて』と云ふお作の言葉に次いで清助が、『大分體にも、品格が出来て來たのう』『や、西洋人の中で磨いて來たから、日本人には珍しいほど色が白い』『大變な別嬪になつたものだ』『それで、ドクトルちうからのう、女でも豪いもんだ』『清助さんもお作さんも好い娘を有つて、嘸ぞ嬉しからう』『何處へ出ても肩身が廣いア』口々に褒めちぎる、親までが大層面目を施した譯だ、

『先生、お健全で何寄りです』延子は近づいて先づ瑞枝と握手した、出迎の後に居た太郎作がそれを見て、『ほう、唐人の禮式をしよる』と眼を圓くした、それより延子は出迎の人々に對して、一々謝辭を述べ、打連立つて村に歸つた、

村の入口には、先年出發の時よりも更に多くの人が出て居て、曾て横柄な面して送つた者共までが、今は丁寧な言葉を以て迎へるのであつた、

昔日の朋輩は皆な路傍に立つて居て、『お延さんは豪いものになつて戻らしたなア』「遠い外國にまで修業に行つての」『それでも頭髮が茶色にならねば、眼の色も舊の儘だの』と一人の娘が云ふと、『それは然うさ、日本人だもの』と反駁する、すると不負氣の娘は、『それでも彼様見られ、色が白くなつて宛然西洋人のやうだ』一同は聲を上げてドット笑つた、

己が娘の榮ある歸郷を、何が可笑くて笑ふのだと、口には出さぬが、然う思つて清助が遽かに憤然とした、それを女だけにお作が、『何か可笑い事が有るのか、別に變な服装もして居らんのに』

これを聞いて居た傍の人が、其の事を説明したので、これもまた笑ひで済んだ、
「照一も此の事を知つて居るのか」と照一の父が心配さうに尋ねた、

(百十六)

「さ、如何だか」清助が氣の無さうな返事、それを聞いたお作は、『延や、お前の歸つた事を、照一さんが知つて居るだらうか』「え」意外の質問に異な思ひをしたが、次いで、『眞逆、分るものですか』「それぢやお前、寄つて來なかつたかい」何んで寄れるものかとは思つたが、『だつてお母さん、横濱から汽車に乗つたぢやありませんか、東京は先向ですわ』「お、然うだつたかの』
其の夜、永沼先生を加へて、延子の歸朝を祝ふ小宴が開かれた、

「これで俺の身内にはお醫者が二人も出來たから、病氣の折の心配は無えの」宴果て、後、清助の言葉であつた、

「何人有つたとて、遠くへ離れて居つては、何んの益にも立たんわの」とお作が云ふ、

「それも然うだ——うむ、時にお主、亞米利加へ行つてドクトルちう豪いものに成つて戻つたは宜いが、これから先き如何する量見ぢや」『こねえな片田舎に居るのは、厭ぢやらうが』とお作が云ふ、

右左から話し掛けられた延子は、「何うせ場所へ出なければ駄目です、妾は東京へ出て一旗擧げやうと思つてますの」『ふむ、それも宜からう——ぢやが、それには随分金子が要るぢやらうての』『そりやお父さん、行りやう次第ですわ、餘り見ツともない事も出ません、先づ最初は成丈け金子の費らんやうにして行り始めませうよ』『シテ、獨身で行らうちうのかい、相手は……』『えッ、相手とは？』『亭主をよ——お前等にとつては旦那様の事ツちや』『はア、良人をですか——妾は獨身でも行てゆけるやうに勉強して來のですから男みたいなものには要りません』と明確云つた、だが、此の決心の中には何處となく寂しさが潜むで見えた、
「それは、不可せ、女が獨りで暮して行くちう事は、逆も出來る事ツちや無え、今の

世には然うした女が澤山有るが、間違の原ぢやちうよ——それよりもお主、寧ろのこと照一の嫁になつては如何ぢや、お前も是程のものに成つたのぢやから今度は嫌と云ふまいよ』『えッ、照一さん未だ獨身で居ますの、妾は疾にお嫁を迎へた事と思つて居ました』『うんにや未だ、お前嫁け、夫婦で營れば是程好い事は無えそれに金が有るから何んでも思ふ事が出來るぞ』『でも尊君、今更——』『何んの、心配は無え、此の前だとしてお前を厭だちうぢや無し、俺がちよつくら行つて話しや、今度は承知するぢやらうよ——のう兄さん』と傍に居る沈黙の、照一の父米藏を顧みた、

「うむ、然うとも——お延さへ嫁つて呉れ、ば、照一の方は俺が受合ふて聽かせる』『それ如何ぢや、伯父貴があ、云はれる、お主さへ承知すりや宜いよ』『それでもねえ、何んだか變だわ』
初めの勢ひでは酷く反對するかと思はれたが、然うでも無し、だん／＼説かれる

に從つて、其の返事にすら當惑するとは、こりや何うも變だわいと思はるゝのも道理、元來延子は照一を慕つて居て、諸方より有る縁談の申込を悉く斥け、爲めに婚期を過ぐるまで待つたのに、其の成業の曉、迎へ取つて呉れんと思つたは夢であつた、失望の極、一時は淵河へ身を投げて果てやうと迄に思つたが、思返して今身となつたのも、因を糺せば失戀から起つた事だ、これが今、昔日の希望通りに成らうと云ふのだから、延子に取つて素より異存の有らう筈が無い、だが、それではと言兼ねて、何か渡りに船の欲しい汐合を見計つて、今迄黙つて居た瑞枝が、『延子さん、然うなさいまし、お父様の仰有る通り、照一さんと御夫婦になられた方が双方の身の爲めで御在ますよ、親御さん達の御満足も其處に在る事で御在ますから妾もそれをお勧め致しますわ』『でもねえ、先生……』と後は眞赤な顔、

(百十七)

茲に延子は清助米藏の兩人に伴はれて東京へ行く事となつた、双方の親々が、双方を突付けて置いて、話しを取極めやうと云ふのである、それと聞いた瑞枝は、『兩方の親御が一緒にお往でになりますのですから別に心配も御在ませんが、こんな事は殿方よりも女の方が話し宜いもの、妾も幸ひ久振で彼地に居る娘に逢ひたいから、一緒にお伴して行つて、照一さんを説きませうよ』との事である、延子は素より、兩人の者も大いに喜んで、『それは願つても無い僥倖な事、貴女が然うして下されば、我々も心丈夫で行かれます』

一行四人、濱田から汽船に衆つて境に行き、同港から更に阪鶴丸に乗替へて舞鶴に着し、それより汽車に乗つて東上した、車中延子は京都附近通過の際には、自分が知つて居る丈の地理の説明したが、二男の頭には本願寺以外何も入らなかつた、

斯くて一行は名古屋で汽車を下り、同市白壁町なる山村先生の宅を訪れたのであ

つた、

悦子夫人は恰度在宅して居て、一行の顔を見、男二人は未知の人だけれど、瑞枝と云ひ將た延子と云ひ、孰れも珍客であるところから、「おや、お揃ひで——さア、此方へ」と、廣い封建時代の建物であらうと思はるゝ、座敷へ招じられた、先づ瑞枝の挨拶から其の紹介で二男は初對面の挨拶、次で清助より娘の世話になつたお禮を述べ、國許から用意して来た土産品を差出す、ついで延子の番になると、悦子は其の厳格な顔に喜びの笑を湛へて、「延子さん、貴女に逢ふのを楽しみに待つて居ました……」先生——と云つた限り、嬉し涙に搔き掻かれて、暫くの間は互ひに言葉も無かつた。「よくねえ、こんなに勉強して来たもので御在ますお互ひにね、斯うしてお世話申した中から、ドクトルの方が出たかと思ふと、何んもなく愉快を感じますわねえ」と瑞枝は悦子に向つて云つた、

「然うですよ、妾も大勢のお子達をお世話しましたが延子さんのやうな方は千人に

一人も有るか無しですわ——よくね、こんなになつて歸つて呉れました」と延子の顔を見る、

「これも偏へに兩先生のお蔭で御在ます、尙ほ此の上とも先生方の御教訓を願つてこれから普通の人として働かねばなりません」

それから永沼先生の説明に依つて、延子が身の振方を話すと、山村先生も大いに賛成されて、「然う成るならば、寔に願つたり叶つたりですねえ、延子さんの才能も、然ういふ適當の場所を得られたならば、遺憾なく發揮されます——然うしてから、いよく御勉強なさいまし」

延子は京都を訪問した事、宣教師に逢つた事、逢つて先生の話を聞いた事等を語つた、また瑞枝も久振での面會の事として、種々の話が有つて、談話は次ぎから次ぎへと移つて果てしが無い、二人の大の男が手持無沙汰に徒然として居て、時折室内の裝飾やら、建物の立派な事を話合つて居たのも、氣の毒なやうであつた、

瑞枝は尙ほ話が盡きないけれど、いづれはまた歸途に立寄つて、寛緩と話合はふとの事で、一同は茲に夫人への別れを告げて同家を辭した、
一行は途中恙なく新橋に着し、それより更に山の手線の電車に乗つて澁谷に向ひ永沼先生の娘が嫁して居る、青山方へと落着いた、

(百十八)

翌日は清助の案内で、有樂町の佐々木方を訪ふ事となつた、
日比谷で電車を乗捨て、有樂町に行くと、先頭に立つた清助が、此の前来た時には無つた高架線の煉瓦を認め、これは何物だらうと目を睜る、延子は初めてだけと流石は新智識の見聞も廣い事とて、これは高架鐵道だと云つて、其説明して聞かしても、一寸解らない、尙詳細に述べて居ると、其處へ電車が来て通り過ぎたのではじめて合點が行つたらしい、

「お、あれ、彼家が照一の宅ぢや、立派ぢやろうがのう」と指示した方を見て、米藏が、「む、彼の高い三階造りのか」「然うだ、家内へ入つて見なさい、大變立派だせ」「ほう」米藏は只だ呆れて居る、

廳て其の立關を訪ふと、以前の立關番出世して今の代診がそれと覺えて居て、直ぐさま書生を主人の許に遣はし、自から出で、一行を應接室へ導いた、

照一は叔父が自分の父と共に來たと聞いて、急ぎ出て見ると、二人の外に未だ見馴れぬ女が二人も居る、けれど、其の一人が延子で有らうとまでは心付かなかつた、
「や、お父様、よくお入來なさいました」「おう、照一、大層大きうなつたの」これが久瀧の挨拶で、それから清助は永沼先生の紹介をする、米藏が、「照一、お前忘れたか、これがお延ぢやよ」云はれて熟々見ると、成程日外の手紙で米國に行つたとは知つて居たが、これほどの女に成らうとは思つて居なかつた、曾て村の小川で俱に笹を持つて雑魚を掬つた頃のお延とは違ひ、ハイカラで垢抜のした、何處へ

出しても耻しからぬ美人となつて居る、延子は黙禮した、照一も軽く會釋して、圖らずも兩人の視線がヒタと行合ふた、延子は忽ち顔を赤くした、

「大層變つたものだから、一寸氣が付きませんでした」と照一が云ふと、米藏はそれを受けて、「おう、違つたともく、百姓の娘がこんなにならうとは誰も思はんでの、それにお前女でも豪いもんぢやよ、ドクトルちうからの」「はア………」とこれには照一少ながらず感動された様子であつた、

氣が付いて照一は、「あ、皆さん、こんな所ぢや不可、座敷の方へ代りませう」と自から先に立つて導く、案内されたのは十二疊の一室である、

「兄貴、立派ぢやらうがの、此の材木から普請、裝飾までが大層なものぢや」と一日の長を誇顔だ、

「うむ、然うだの」更に運ばる、調度器具を見て、「これは昔しの大名家ぢや無うては有たぬ品ぢや、これが伴の家かと思ふと、何んだか浦島が龍宮へでも行つたやう

な心持がする」と言出す、

それより一同は山海の珍味で御馳走に預りながら、瑞枝の口切で縁談が始まつた、延子が失望の極、發奮した當初の事から、米國にまで渡つて勉強した事、及び學位を得て歸朝した今日までの事を甲述べ、乙語り、丙話すといふ有様、而して、

「これも誰ゆゑ、皆なお前から起つた事ツぢや……な、それを思へば俺等の云ふ事を聽いて呉れても宜からう」と清助が云ふと、直ぐ其の尾に付いて、「聽いて遣れよ、お延もお前それを願つて居るぞ」米藏の云ふを傍から延子が、「伯父さん、嫌ですよ、そんな事を………」と顔に紅葉を散らす——、瑞枝は流石に教鞭を執る身丈けあつて、「佐々木さん、只今申上げました通り、延子さんが多年の心勞は、實に同情に價ひするぢや有りませんか、それに獨身で暮らさうとの決心であつた處を、貴君ゆゑならば枉げてもと云ふ、其の切なる心情をお酌みになつて、何卒當人はじめ御親族一同の希望を遂げさして上げて下さいまし」と諄々として説いた、

照一も今は否む術もない、「それ程までに親族一帯の希望と有るならば……」
と漸くにして延子を娶る事を承諾した、一同は大喜び、中にも延子は嬉しさを胸に
裏んで、一先づ青山方へと引揚げた、

(百十九)

先頃より佐々木邸に起臥して居るさかえ子は、他家とは云へ、吾家に等しい當家
に在つて、朝夕三十間堀の宅から仲働も来れば、また會社の社員も来り、それに電
話を利用するので、更に不自由は感じない、其の中で、只だこれ程までに仕て貰は
んでもと思ふのは、佐々木家の小間使を一人附置かれて、絶えず親切にさるゝ事であつた、

今日も居室に於いて、照一と事業上の話をして居ると、晝生が来て來客有る旨を
告げる、照一がそれに立つた後は容易に顔を見せない、如何した事と思つて居ると、

何うやら幾人かの來客が有るらしい、其處へ来た小間使を捉へて、「お客様がお有
ンなさるやうだね」「左様で御在ますよ、旦那様のお父様が入来しやいまして、大
賑かで御在ます」「然う、お父様と云ふのは、どんなお方ですか」「はい、田舎の
方で、極くもう質朴らしい好いお方です」「何んだか大勢のやうね」「お四人で居
らつしやいますわ、叔父様に其娘御と、今一人中年の婦人の方が……」「道理で
女の聲がするやうですね、娘御とは、そりや佐々木さんの何に當るのでせう、從兄
妹ですか」「左様で御在ます、お從兄妹に當る大層美人ですの、何んでも永く米國
とかへ行つて居て、ドクトルださうですが却々のハイカラで御在ますわ」

さかえ子は聞くと直ぐ、彼の花子の事を思ひ浮べた、
「能く似て居るわね、貴女知つてお居でだか如何か、それ、彼の内幸町に居た米
山さ、一時佐々木さんの意中の人で有つた」「然う、御在ましたね、成程、米
國歸りのドクトルと云ふ點は似て居ますが、人品は全然違ひます、あんなお狭ちや

無くて、人柄の好い女ですよ、それにあれよりも數等御容貌美で御在ます」「花子さんより美くては、そりや餘程の美人ですね」さかえ子は少々嫉ましくなつて來たのでついでに訊く、「其の女の方は是迄も來た事が有りますか」「いえ、今度初めて御在ます、其の人のお父様は一度來られた事が有るさうですが、餘の方は皆初回で——」「何しに來たのでせう、東京見物か知ら」「妾よくは存じませんが、何んでも御縁談の事らしいのですよ」「そりや誰方様と」「旦那様とで御在ます」「えッ」とばかりに愕き、さかえ子は天地が一時に轉倒して、地軸の碎くるかと覺えた。

茲にさかえ子は急に眼が暈ひ出し、頭がガン／＼鳴つて來た、到底正座するに堪へない、小間使に命じて夜具引出させ、蒲團打被つて横になつたまゝ、夢現の間を辿つて居た、

程經て來た照一が此の有様に驚いて、種々劬つた末、「須美さん、斷念めて下さ

い、私は今度延子と云ふ從兄妹と結婚せねばならぬ事となりました、就ては貴女の御希望を無にする嫌ひは有りますが、何卒御勘辨下さい——尤も、これは既に双方の親々の間に話が出来て居て、殆んど許嫁のやうであつたが、血族結婚は私の好まなかつた爲めに、一時沙汰止みとなつて居ました、併し、親々の希望は依然其處に有るので、其の後未解決のまゝで居ました、日外貴女に事情が有ると申したのは即ち是れです——處が、今回種々の關係からして、如何しても娶らねばならぬ事となつたのです、何卒惡からず御諒察を願ひます」

これが最後の宣告である、さかえ子如何に男勝とは云へ、女は矢張り女に過ぎない、二言三言争つて見たが、到底覆へす事は出来ぬ、遂に折れて了つて、

「妾が悪う御在ました、貴郎の御異見に順へばこんな事には成りませんでしたのに如何しても思切れないので、相變らず慕つて居たのが妾の過失でした、あゝ不運な女です」

落ちる涙は瀧津瀬のやう、さかえ子は其の場突伏した、照一は種々慰めて去つた、

(百二十)

さかえ子は其の日の夕、照一が好意上止むるのも肯かないで家に歸つた、

歸つても心地悪しと云つて直ぐに臥床を展べさせて其の中に藻線込んで了つた、日が暮れてから照一が尋ねて来て、尙ほいろ／＼と慰めたが、さかえ子は餘り口敷を利かない、日が経つたならばと思つて、心配しながら引取つた、

跡に仲働の女中は其の側に詰めて居て、主人大切と遅くまで介抱するのである、さかえ子は開を係がして寢に就かした、

夜は沈々として更けて行く、時計の秒を刻む音のみ聞えて居る、此の時、臥床の上不起直つたさかえ子は、料紙硯箱を引寄せて何やら書初めた、情激して筆端爲め

に火を發するかと疑はれた、

書了つて、堅くこれを封じ、表記して上を、更に一枚の紙に包んで、机の上にと置いた、

次に取出したのは、一口の懐劍、鞘を拂つて明晃々たるをチツト囑め、

「嫁入の時、護身にせよとて下された此の刀、両親も眞逆これが自分の身を絶たうとは思ひなさらんであつたらう、妾とても矢張り然うであつた、あゝ、護身用とは身を殺す道具を云ふのであらうか」獨語して、これを逆手に取直した

折柄、増上寺の鐘が陰に籠つて鳴響く、

夜が明けると須美家はまた大變である、直ぐさま有樂町へ電話が掛かる、照一は駭いて駈付けた、

さかえ子の居室に行て見ると、香の馨り先づ鼻を衝て、次ぎに来る血腥い臭ひを

薄らげて居る、さかえ子は端然として布団の上に坐し、懐劍を喉に當てたまゝ一糸亂れず、立派な死様をして居る、周圍を彩る韓紅は、躰を迸つて未だ間の無いものと思はれた、

流石に職業柄、照一は先づそれに眼を着けて、直ぐさま其の脈を検した、何うやら胸部には微な、體温が残つて居るらしい、抱きながら耳元に口、「須美さん、須美さん、佐々木ですよ」此の聲、將に九天に昇らんとする靈に通じてか、閉ぢた眼の幽かに開かれて、また徐かに塞がれた、斯うなつては如何な醫師も、最う手の下しやうが無い、さかえ子は愛する人の手に抱かれつゝ、安らかに永久の眠に入つて了つた、

「遺書」と書した包紙を除つて見ると、封筒には敬愛する吾が佐々木照一様、不幸のさかえ子と録してある、これで友達の遺書を披くのが再度だと思ひながら押抜いて讀下すと、

先づ事業を共にして、自分を輔けて呉れた事を謝し、一轉して戀愛の俘となつた事を述べ、再轉して須美家の事に及び、更に筆を進めて、自分は今失望の極、他を顧みるの暇も無い、此の失望より自分を救ふは、只だ一の死あるのみと筆を停めてある、

これが自殺の理由であるが、尙ほ死後の事に就いては、自分が初めて貴下と相見えたのは、青山墓地であつたから、同地に葬つて貰ひ、而して法要等は一切貴下の手にて營んで貰ひ度し、其の代り須美家の財産は全部貴下に贈る、としてある、尙ほ最後に、延子様と睦まじく、未永う暮らされたし、自分はそれを草葉の蔭より、喜んで見て居るとの旨が書添えてあつた、

照一は其筋の檢死済の上、死體を請受けて、鄭重なる葬儀を營み、青山墓地に在る夫勇藏の傍に埋めた、

* * * * *

程なく照一は延子と結婚した、また先に結婚した鹽見夫妻を説いて、須美家を相續させる事とし、これにさかえ子の遺産全部引渡し、次ぎに清太郎も學校を卒業して、水産業に従事したので、これへも先年周作から贈られた、遺産の百萬圓を譲つたのである、

斯くして照一は、本職たる醫業に於いて、延子と云ふ最好の助手が出来、また副業なる水産の方には、茂吉清太郎の股肱を得て、業ますく盛に、財いよく殖え、今に獨力を以て、慈善病院を設立するの計畫で居るとの事だ、

小家庭
涙 (終)

大正元年十月二十日印刷
大正元年十月廿三日發行

涙 奥付

定價金五拾錢

不許複製

著者 黒法師

發行者 越元次良

東京市日本橋區堀船町三丁目一番地

印刷者 菅井十郎

東京市神田區松住町五番地

印刷所 菅井活版所

發行所

東盛堂書店

東京市日本橋區人形町通水天宮側

郵便振替貯金口座
東京七五〇六番

洋装四六判
装訂頗美本

載所聞新とまや

灯ともしび

著月隼林小

本書やまと新聞に連載さるゝ
や數十萬の讀者に非常なる喝
采を以て迎へられ(不如歸)以上
の悲劇として多大なる好評を
博せし家庭の好讀物にして又
青年子女諸君必讀の良書なり

定價七十五錢

送料六錢

藪野 掠十先生序 てい 女作

東京朝日新聞 家庭友
連載小説

洋装菊版頗美本
定價金六拾五錢
郵税金八錢

嘗て東京朝日紙上に連載、多大なる好評を得京都明治座静間
小次郎一座其他各地劇場に於て非常なる喝采の博し近時文壇
を賑したる本書は友愛の涙に富み頗る變化ある悲劇物語を著
者てい女史の艶麗優雅なる筆を以て非常なる苦心執筆せしめ
たる物世已に定評あり 藪野掠十先生の巧妙なる序文と相待
つて須らく讀まざるべからず。

空左衛門作 伊藤靜雨畫

やまと新聞
連載 淺香三四郎

洋裝四六判
裝訂頗美
口繪美麗色刷寫真
定價金四十錢
郵税金六錢

五版發賣

家庭講談としてやまと新聞紙上に連載大好評を博し數十萬の讀者をして熱狂せしめたる血湧き肉躍る壯絶快絶の武勇譚、眞に讀者をして卷を掩ふに堪へざらしむも宜なる哉、劇場活動寫眞等にて演ずる事數十回、如何に興味あり、家庭の娛樂的讀物として他に求むべからざるは本書也是非御一讀を薦む。

空左衛門作 伊藤靜雨畫

やまと新聞
連載 石川寅次郎

洋裝四六判
口繪美麗三色版
全二冊
定價各金四拾錢
郵税金六錢

本書は家庭講談としてやまと新聞紙上に連載せし
大好評を得各地劇場等にて演じ非常なる喝采を博したる加州家の忠臣
石川寅次郎政房の傳記にして君家の奸賊を除かん爲め或は屈辱を忍び或は刺客の毒
及に倒んとし幾多の辛険をなめ盡し終に其宿志を遂げたる快傑譚一度これを
緋けば變轉限りなき壯快は忽ち讀者の目前にせまる宜なるかな初版再版既ち賣切、

重版又た重版出版界空前の盛況を呈したる家庭
の娛樂讀物

破天荒好評四版

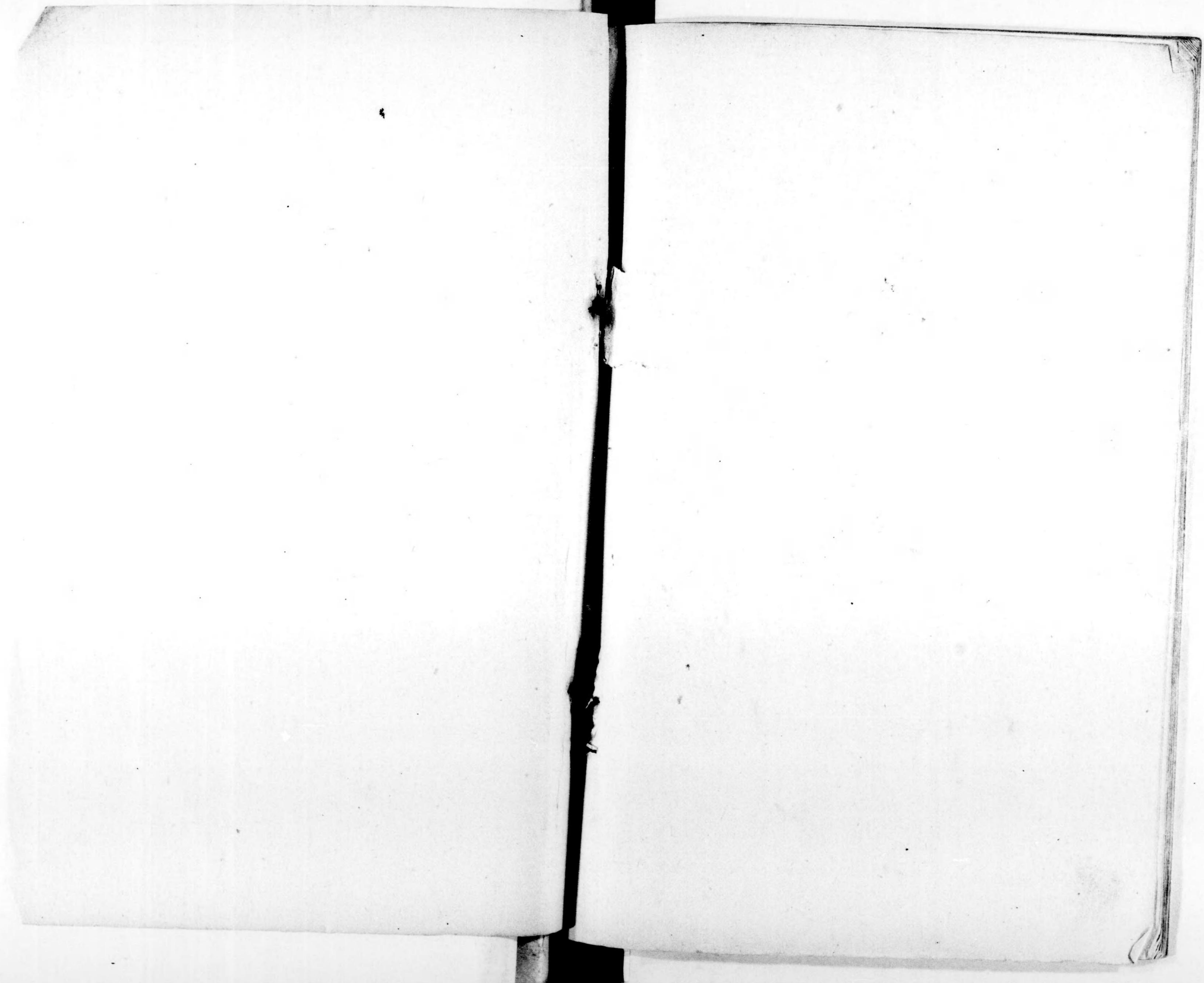
匿名氏著 松亭畫

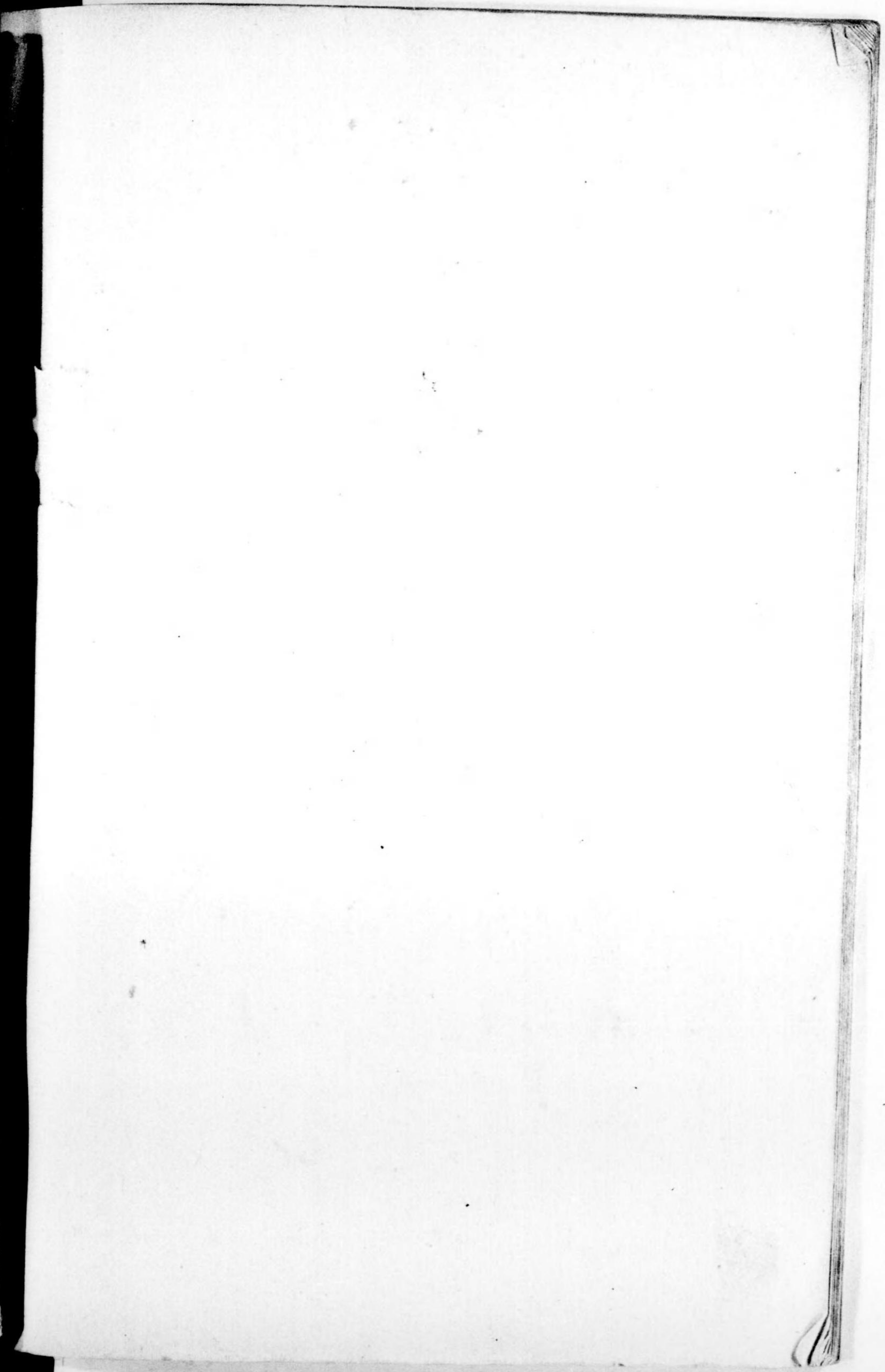
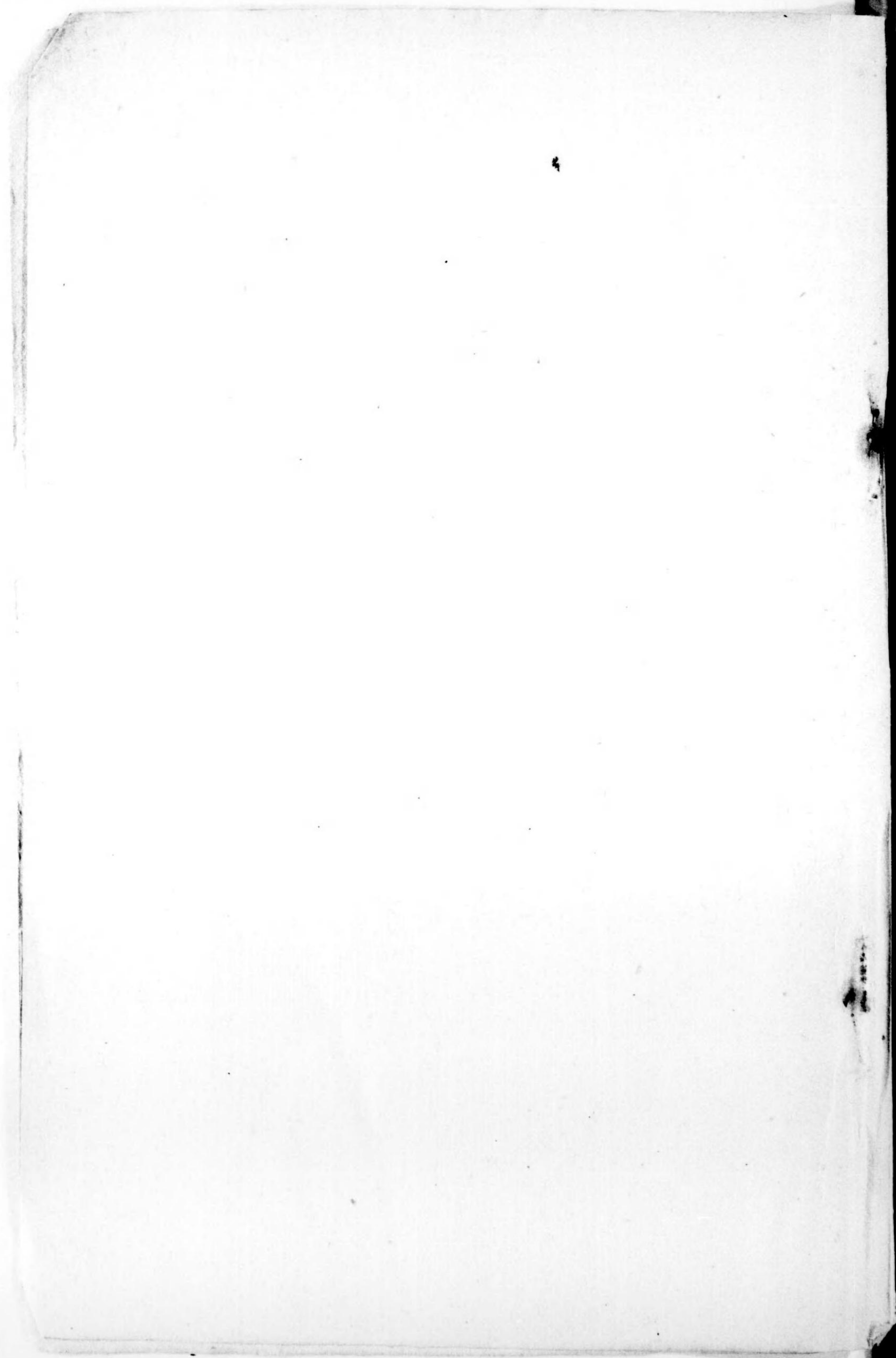
家庭
小説

女の操

洋装四六判装釘頗美
口繪色刷コロタイプ
定價三十五錢
郵税四錢

本書の内容 現代富豪の家庭を書ける物幾多波瀾曲折
に依り悲遂に喜となり圓滿に千秋樂となる、令嬢の女教師
あり青年の立志談あり頗る變化に富み涙ある物語純
傑なる家庭の讀物として適當乞ふ愛讀を給へ





272
401

終

